

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報 第217号 2008年7月20日

OCHADAI GAZETTE Summer, 2008



最良の教育・研究環境の創成

充実する活躍のステージ

CONTENTS

TOPICS

教育環境の充実.....1	
21世紀型リベラルアーツ	
国際化の推進.....2	
国際交流プログラム	
学生のアクティビティ.....3	
いずみナーサリー保育ボランティア	
第2のマリー・キュリーをめざせ	

教員紹介.....5	
矢島知子先生（理学部化学科）	
平成20年度入学式学長告辞.....7	
キャンパス点描.....9	
奨学金受賞者決定	
大学院オープンキャンパス	
学生ポータルサイト開設	
第二回ホームカミングデイ	



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

世界に発信する21世紀型リベラルアーツ

2008年4月から文理融合リベラルアーツが始まりました。

私たちが学ぶ知識は、専門的でないと役にたちませんし、同時に国や文化が違う相手にも伝える必要があります。

グローバル化時代の現代では、高度な専門教育を支えこれを使いこなすために、発信・交渉能力、領域横断的な視野、変化に対応する判断力を養う必要があります。知識そのものの基礎であり、生涯をととして、「自在に（リベラル）つかえる技（アーツ）」を学ぶことが、「21世紀型リベラルアーツ」の目的です。

現代世界の鍵となる5つのテーマ

新プログラム「文理融合リベラルアーツ」では、文系理系にまたがる5つのテーマ（生活世界の安全保障、色・音・香、生命と環境、ことばと世界、ジェンダー）にそって、講義・討論・発表・実験実習・演習を組み合わせた系列科目群をつくり、自然・人文・社会の3つの角度から多面的に学びます。演習・実験・実習を通して、読み・聞き・書き・語り・作るという5つの能力を養成します。演習では、テーマに関連するテキスト（書物や論文）を読み、発表・討論し、レポートを書くことで、読解力や表現力を高めます。「生命と環境」や「色・音・香」では、海の生物を採集し観察する実験や色や香りを分析する実験を行うことで、自然の仕組みを体感します。「生活世界の安全保障」では、NPOでのインターンシップなどを通して、実践力を養成します。

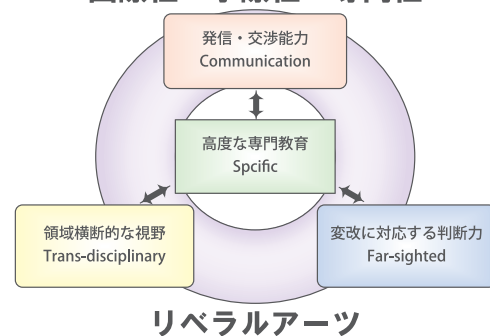
いずれも21世紀の世界の鍵となるテーマです。どの系列でも文理双方から問題を問いかけ、ここを「切り口」として知識と経験を広げ、主題を根源から理解します。20年度は、「生命と環境」「生活世界の安全保障」「色・音・香」の3つの系列がスタートしています。



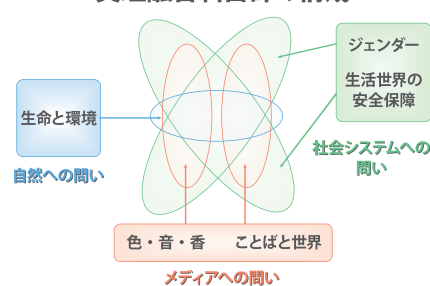
専門力を生かした多様な進路を切り拓く

このような教育プログラムは、ひとつのキャンパスに人文科学、社会科学、自然科学の3つの系列の教員が集うお茶の水女子大学だからこそ、可能なのです。大学1～2年生の段階で「文理融合リベラルアーツ」によって学際的で実践的な力をつけることによって、専門力をいかした多様な進路が切り拓かれます。

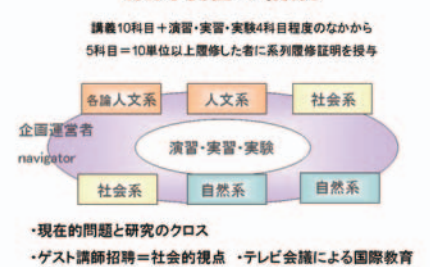
国際性・学際性・専門性



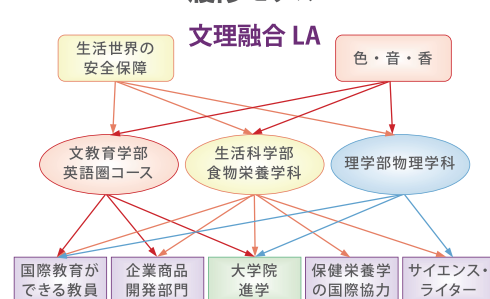
文理融合科目群の構成



系列項目の構成



履修モデル



国際化の推進

国際交流プログラム

本学が取り組んでいる国際交流推進のための様々な交流プログラムの中から二つをご紹介します。

まず最初は、韓国の協定校、同徳女子大学校との間で2004年から行われている日韓大学生国際交流セミナーです。毎年8月に、両校の学部生が参加して本学または同徳女子大学校で開催されています。

プログラムの内容は、日韓双方の学生による研究発表と討論、野外実習、文化史跡探訪、両大学教員による講演などで、相互の文化を紹介し、理解しあうことを主な目的としています。昨年は「グローバル時代における日韓の重要性」をテーマにセミナーが行われました。

韓国開催時には学生宅でのホームステイを通じ韓国の文化や人間関係を体験したり、日本語学校を訪問したりしています。日本開催時には本学の茶道、狂言、日本舞踊、箏曲などの日本文化系サークルとの交流を実施しています。セミナーは、互いの文化に触れ、語り、ともに過ごすことを通して、アジアにおける交流の重要性にめざめるきっかけとなっています。

次にご紹介するのは2006年から行われているヴァッサー大学夏期日本語・日本文化研修プログラムです。アメリカ東部にあるヴァッサー大学も本学の協定校です。本年度は6月1日から7月27日までの8週間、男子学生10名、女子学生8名の計18名を本学に迎えます。

プログラムでは、日本語の授業と会話レッスン、本学の授業（英会話、生活科学の授業及び多文化交流実習）への参加、フィールドトリップなどが行われます。ヴァッサー大学の学生の参加する授業ではお茶大生との意見交換が活発に行われます。

さらに、ヴァッサー大学の学生は、それぞれの興味に応じて、本学のサークル活動やグローバル教育センター主催の文化教室に参加します。茶道や書道教室、着付け教室などの日本文化に関連する活動は人気が高いようです。文化教室はお茶大生も参加できます。みなさんも日本の文化を通じた国際交流を体験してみませんか。



世界女子大学連盟学生会議（ワークショップ）に学生を派遣

6月10日(火)～13日(金)に、米国マサチューセッツ州のマウント・ホリヨーク大学で開催される世界女子大学連盟学生会議(ワークショップ)に、本学から2名の学生を派遣しました。

この会議は、世界女子大学連盟に加盟する欧米、アジア、アフリカなどの大学から、学長が推薦する学生（各大学2名）が集まり、女性のリーダーシップに関する4つのワークショップに参加します。そして、ワークショップで得た知識や力を活かして、今後、女性リーダーとしての活躍することが期待されるものです。

女性のリーダーシップに強い関心を持ち、英語でのコミュニケーションに意欲のある学生を学内で公募した結果、平原紀子さん（文教育学部言語文化学科グローバル文化学環3年）、立林瑞穂さん（生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座4年）が本学の代表として参加しました。

学生のアクティビティ

いずみナーサリー保育ボランティア

人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻 保育・教育支援コースM1 山下紗織

ボランティアとして初めていずみナーサリーを訪れた日のことを、私はとてもよく覚えています。お昼寝から起き出してきた1歳になったばかりの小さな女の子が、画用紙で制作している私を見つめ、少ししてから、にっと笑いかけてくれました。その時からもう1年半以上経ちますが、子どもたちの笑顔が、今でも何よりの喜びと励みになっているように思います。

大学附属の保育施設である「いずみナーサリー」には、0歳から2歳までの子どもたちがいます。私は今、大学院で保育や幼児教育を学んでいます。それと並行する形で、週1日、ボランティアとしてさまざまな経験をしています。まずは、私がナーサリーでどのようなことをお手伝いしているのか紹介させていただきたいと思います。

午前は、子どもたちはお散歩に出かけます。私も両手に小さくあたたかい手をにぎり、いつもよりもゆっくりとしたペースで歩きます。ゆっくり歩いていると、普段見えないものがよく見えてきます。地面をせっせと歩く蟻や、ひらひら舞う蝶々、それから岩の下でもそそと動く団子虫。思わずふーっと吹き飛ばしたくなるタンポポの綿毛や、ころころ転がっているドングリの実、がさがさ音を立てる落ち葉や、ふさふさしてくすぐったいハルジオン。子どもたちは、ひとつひとつのものをじっと見つめ、触れながら、何かを感じて歩いているようです。私はそんな子どもたちにたくさんの発見をさせてもらいながら、歩き続けます。危険な場所や子どもたちの動きに気を配りながら、共に歩き外で遊ぶことで、自分自身も開放的になり、充実した時間を過ごすことができます。

お散歩から帰ってきて子どもたちが午睡に入ると、室内の壁画やおもちゃ、お誕生日カードなどの制作をします。保育士さんのアドバイスをうかがい、どんな絵にしたら子どもたちが喜ぶかな、どんな遊びが発展するかな、そんなことを考えながら、制作をします。お部屋に自分の作った絵やおもちゃが並び、それを見たり使ったりして遊ぶ子どもたちの姿を見ると、何ともいえない、幸せな気持ちになります。子どもたちが楽しく安全にのびのびと遊べるような環境作りのために、少しでもお手伝いできたらと思っています。

お昼寝から起きておやつを食べた後、子どもたちはお部屋の中で自由に遊びます。お迎えまでのこの時間、遊びに夢中になり、何かに真剣に取り組んでいる子どもたちの姿に出会い、いつも驚かされます。ちょっと見ただけでは何をしているのかわからなくても、よく見てみると、子どもたちはとてもおもしろいことをしていることに気付きます。そのおもしろさ、興味深さ、不思議さは、どうしてもうまく表現できそうにありません。毎回帰った後には一日を振り返るのですが、その日の出来事や感じたことがぐるぐると頭の中を回ります。それを記録として、



ナーサリーにメールで報告します。保育士さんは毎回とても丁寧に返信をくださり、とても勉強になります。そうして考えたことがまた、翌週につながっていきます。

ボランティア活動について簡単に紹介させていただきましたが、ナーサリーでボランティアをしていて良かったと思うのは、学ぶのに最高の環境だということです。ボランティアを始めた学部時代、私は日本文学を学んでいました。保育士資格も幼稚園免許も持っておらず、まったくと言って良いほど保育のことがわからない私に、ナーサリーの保育士さんたちはとても丁寧にアドバイスをくださいました。今でも、気付いたことがあればその場ですぐに声をかけてくださったり、メールでお話しくださったりします。保育士さんのお話をうかがい、自分の思ったことを聞いていただくことで、新たな視点を持って子どもたちに接することができます。

また、ナーサリーの保育士さんたちだけでなく、大学の先生方も、たいへん親身に相談にのってくださいます。勉強会を設けてくださる先生もいらっしゃるの、大学の授業の中での勉強と、ナーサリーという実践の場での勉強と、両方をバランス良く学べます。ほんとうに恵まれた環境の中で勉強させてもらっていると、日々実感しています。

ボランティアを通して学んだことは、ここには書ききれないほどたくさんあります。うまくことばに表わすこともできそうにありません。子どもたちと接していると、わからないことばかりで、毎日疑問点が増え続けていきます。その不思議に思う気持ちを大切にしながら、子どもたちをよく見てその気持ちに思いを馳せ、自分自身のことも見つめ直していくことが大切なのかなと、今は考えているところです。子どもたちには教えてもらうことがたくさんあります。共に成長していけるように、日々努力したいと思っています。

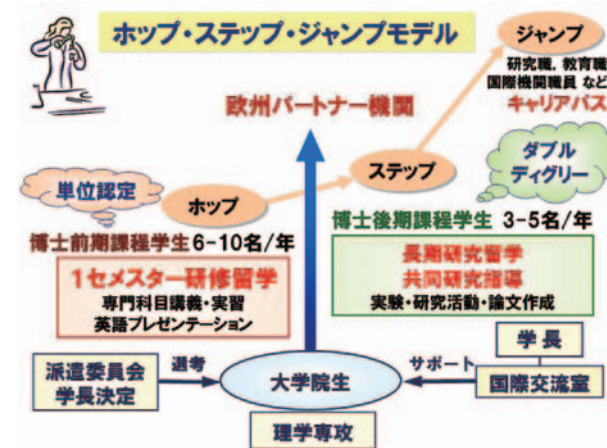
最後になりますが、私が今こうして大学院で子どものことについて学んでいられるのも、学んでいて楽しい、もっともっと学びたい、自分の進むべき道はこれかもしれないと思えたのも、ナーサリーでボランティアをしていたからこそです。これからの日々、ナーサリーで子どもたちと共に過ごすことのできる貴重な時間を大切に、共に歩みながら、ゆっくりと学び続けていきたいと思っています。

校風をつなぐ女性科学者の育成

ー第2のマリー・キュリーをめざせー

(日本学術振興会 若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (若手ITP))

日本学術振興会の平成20年度の事業(若手ITP)に本学が提案したプログラム「校風をつなぐ女性科学者の育成」が採択されました。このプログラムでは、女性人材育成の土壌のある欧州研究機関に大学院生(理学専攻)を派遣します。3つの段階を経て社会に羽ばたく「ホップ・ステップ・ジャンプモデル」を構築し、国際的視野をもつ女性研究者を育成すると同時に、人材育成モデルとして学内外に発信していきます。平成20年度には、1セメスターの研修留学に9名を、研究留学に2名を選考しました。6月ー8月上旬の語学研修および異文化理解・危機管理研修、9月の英語プレゼンテーション研修など、秋からの留学に備えて、留学準備支援も充実しています。



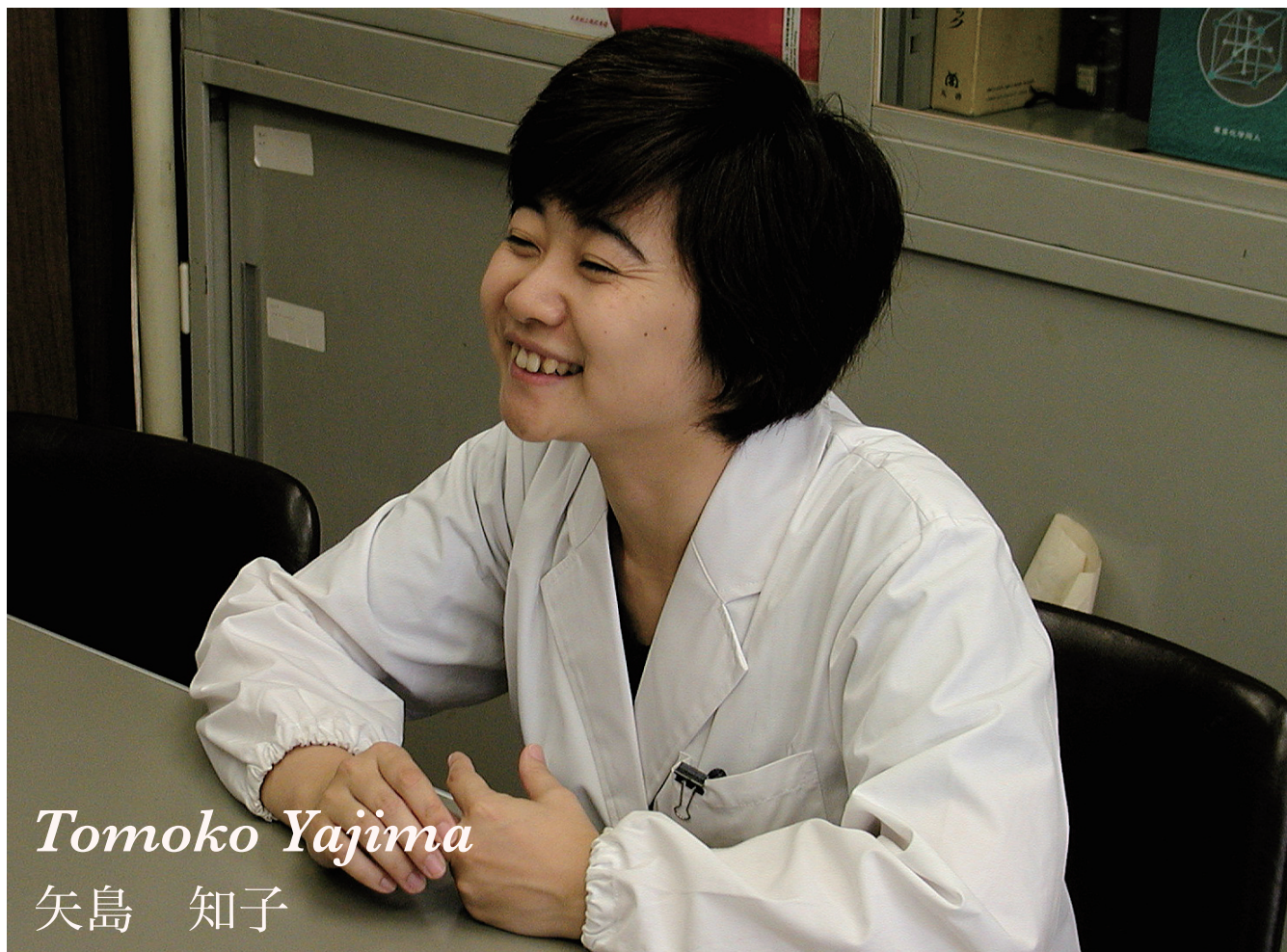
学生のアクティビティ

教員紹介

日常から生まれる最先端の化学

ご自身の研究や教育観などを語っていただく「教員紹介」の第4回は、人間文化創成科学研究科自然・応用科学系（理学部化学科）の矢島知子先生にお話を伺います。

今回は文教育学部人文科学科比較歴史学コースの佐藤悠さんがインタビュアーとなり、矢島先生には研究テーマのほか、研究と子育てを両立させるなかで日々感じていることについても語っていただきました。



Tomoko Yajima
矢島 知子

仕事と家庭と、どちらも60点。
でも両方足せば、120点になるでしょう？
そうやって楽しめればいいと思っています。

先生のご専門は？

私の研究では、フッ素を含む有機化合物の合成が大きなテーマになっています。フッ素というと珍しく聞こえるかもしれませんが、テフロン加工など日常品の材料として用いられています。また、よく使われる医薬品ベスト10のうち、半分以上にフッ素が使われているんですよ。「身近にはないわ」って思っている人でも、朝ごはんでテフロン加工のフライパンで玉子焼き焼いて食べていますよね。知られていないけれど、身近なものなんです。フッ素は周期表ではハロゲンの仲間ですが、ハロゲンの中でもちょっと変わった特性を持っています。具体的に言うとマイナスの電荷を引きつける力がとても強い元素なので、例えば、酵素阻害剤の構造の中の水素原子をフッ素原子に置き換えるこ

とで、異なる性質をもつ阻害剤をつくるのが可能になります。ただ、変わった特性を持っているので、フッ素化合物を合成するのは難しいんです。そこで私はラジカル反応に着目しました。一般にラジカル反応は、反応性が高すぎて、精密有機合成には不向きとされていたんですね。しかし最近になって研究が進んで、小さい分子を合成するのにも使えるんじゃないかと見直されてきています。そこで、ラジカル反応を用いてフッ素化合物を合成する研究をしています。最近ではタンパク質の構成要素であるアミノ酸にフッ素を導入する反応を見つけたのですが、生体関連分子として新規な機能を期待しています。



研究を通じて、面白いことは...そうですね、日々の小さな喜びをすくいあげている感じです。たとえば、自分でたてた仮説どおりに反応が進んだ時とか、こうしたらどうだろうと考えたことが成功した時はうれしいですね。

もちろん、そうしたデータや結果をまとめていって、大きなものとして提出できたときにはそれはもう嬉しいですけど。

研究を志すきっかけは？

高校生の時には、生物が好きだったんです。生き物の体が動くしくみは、全部化学反応で起こっていますよね。その生体反応にすごく興味があって、大学で学びたいと思って東京工業大学に入学しました。東工大では学科の区分が緩かったので、生物、化学のどちらにも進学することができました。その中で、一つ一つの生体反応の基礎になるのは有機化学だから、それを学べば将来的にも役立つと思ってこちら（化学）の分野に入ったんです。そして現在は有機化合物を生物に取り込んでいく研究をしているわけですから、はじめに抱いた興味に徐々に近づいてきていますね。

研究者としての進路を確実にしたのは、M2の夏のアメリカ留学ですね。研究室の環境は整っているし、指導してくださった先生も研究だけでなく教育にも熱心で、親身に相談に乗ってくださいました。その時に、先生から「一人前の研究者になるならドクターは取るべきだ」とアドバイスを受けました。今思えば、大学院生という研究者として走り始めたばかりの頃に留学経験ができたというのは、その後の進路決定に非常に強い影響を受けました。

子育てとの両立について

大変なところは...気持ちの切り替えが難しいですね。いつもは、幼稚園に子どもを送って行ってから電車の中で研究者モードに切り替える。帰りは逆でお母さんモードに。でも、どこにいても罪悪感みたいなのはあります。たとえば、子どもの面倒見ながら「あの反応をやりたいな...」とか思ってしまいますし、大学にいても子供のことを「元気にしてるかな」とか考えてしまいます。あー、みなさんごめんなさいっていう気分です（笑）。

母にも手伝ってもらおうと思って、子どもが生まれてから両親のそばに引っ越しもしました。幼稚園への送りは私がやって、迎えはばあば（＝母）。協力してもらっています。休日には、幼稚園のイベントの準備とか、そういった細々したお母さんとしての宿題に追われています。だから、休みの日も仕事はなかなかできません。まあ、それはそれで私は楽観家なので、割り切っています。

お茶大は環境が整っているので、育児サポートの下地があるのがいいですね。また私は現在、COSMOSプログラム*のモデル研究員としての支援を受けており、アシスタントの方や共同研究をするポスドクの方をつけてもらっています。プログラムについての調査報告など大変な点もありますが、これからお茶大で研究者になる人たちの環境づくりに活かせるのであれば、と思います。



お茶大の魅力は？

先生と学生との距離が近いのが新鮮で、いいなって思います。今は授業中だから来ないけれど、研究室のドアが、絶えずノックされるんですよ。1年生でも、わからないことがあればどんどん聞きに来ます。学部のうちか

ら、先生と近い距離で学べるというのは本当にうらやましいし、いい経験になると思います。「こうしたらうまくいくんじゃない？」とか「こうやってみよう」とか、学生と先生というよりは、共同実験者って感じですね。だから、「先生うまくいきました！」なんて見せにきてくれると、「やったね！」なんて一緒に喜んでしまいます。そういうところにも楽しさがあります。

あとは、お茶大では学生のうちから女性のキャリア形成について知識を得る機会があります。先日も「お茶の水女子大学論」の講義でお話ししましたが、「こうあるべき」という確固たるキャリア像だけでなく、その時々で柔軟に対応していくことが必要だと思うんです。でも、そういうのってなかなか知る機会がないでしょう。それを提供される場があるのはとても恵まれていると思いますよ。

お茶大生にひとことお願いします

そうですね、文理選択で迷っている高校生や、次の世代の子たちには「化学ってちょっと面白いかな」って思ったのなら、ぜひ来てもらいたいですね。学生の皆さんには「24時間自分のために使えるのは今しかないわよ」って言いたいですね（笑）。やはり、女性は結婚や出産、育児とか外的な要因に束縛されがちなところがありますから、あとになって、「もっと勉強しておけばよかったー」とか後悔しないように精一杯やってほしいです。まあ、勉強も確かに大事なんですけど、その時にしかできないサークル活動とかもですね。私もそうですが、学生時代に出会った人たちは、一生の友だちになるはずですから。

でも、だからと言って出産とか、そういう人生の節目の場面では、深く考えすぎてためらわないでほしいですね。確かに子育ては大変ですけどね、でも楽しいですから。仕事と家庭と、どちらも60点。でも両方足せば、120点になるでしょう？そうやって楽しめればいいと思っています。

*科学技術振興調整費により、本学が実施している女性研究者育成事業（平成18～20年度）の愛称。COSMOSは、Career Opportunity Support Model from Ochanomizu Scientistsの頭文字。

教員紹介

日常から生まれる最先端の化学

平成20年度入学式

学長告辞

お茶の水女子大学に入学された528名のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんをお茶の水女子大学の新しいメンバーとしてキャンパスにお迎えできたことを、心から嬉しく思います。

みなさんはいま、念願叶ってこの入学の日を迎えられて、感激で胸がいっぱいでしょう。また、この日までの長い年月、お嬢様の教育に心を砕かれ、ご成長を見守ってこられたご家族のお喜びもひとしおと、心よりお祝い申し上げます。

本学は1875（明治8）年11月、東京女子師範学校として開学いたしました。日本で最初の女子のための高等教育機関です。今から133年前のことになります。のちに、東京女子高等師範学校となり、通称は女高師と呼ばれておりました。開学当時の設立場所は文京区大塚ではなく、湯島、現在の東京医科歯科大学のあるJR御茶ノ水駅の近くでございました。その後、関東大震災により大きな被害を受けまして、現在のこの大塚の地に新たに校舎が建てられました。震災の教訓をいかしまして頑丈につくられましたこの徽音堂、そして徽音堂を取り巻く大学本館は、ここ4年に渡る改修で装い新たに甦りまして、大学正門と附属幼稚園園舎とともに、国の登録有形文化財として本年3月、登録されたばかりでございます。

お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のあるすべての女性のために、真摯な夢の実現の場として存在することを使命としています。そしてそれは、本学が女子大学だからこそ実現可能なのだと確信しています。

女子大学の最大のメリットは、女性同士がお互いに切磋琢磨して成長していけることです。さらに、本学の場合は、少人数教育で先生方の目が一人ひとりに行き届きます。ですから、徹底的に鍛えられます。また基礎教育を重視していますので、違う専門分野に移ったとしても応用が利き、結果として幅広い可能性を手に入れることができます。女性だけで、少人数で、しかも基礎教育を重視するということ。これが、お茶の水女子大学の教育の基本です。

さらに、本学の最大のアピールポイントは、世の中のさまざまな分野で活躍できる女性リーダーを育てるための最適な環境条件が整っていることです。本学の卒業生には社会の指導的な立場で活躍している方が大勢いらっしゃいます。とくに研究職、教育職について活躍された方々は全国の隅々まで行き渡っています。優れた女性リーダーを育む校訓と伝統は、現在まで絶えることなく続いております。

現在、86の国立大学法人のなかで本学と奈良女子大学の2つが女子大学として存在しております。私立の女子大学には女性の学長も数多くおられますが、学長が女性である国立大学法人は本学のみで、さらに女性の副学長がいる国立大学法人は4校で5名という少なさです。そのなかの4名は本学の出身者でございます。ここにも、本学の使命の実現の一端が現れております。

世界がグローバル化するなかで、本学では新たに国際本部をつくり、国際性を豊かにするための準備も始めました。この2月にはタイのバンコクに、初めての海外拠点としてお茶の水女子大学のオフィスを設立し、その開設のレセプションには、本学の卒業生が大勢駆けつけてくれました。また、世界中の有力大学とも大学間協定を結び、さかんな国際交流が行われております。このように、現在、本学は新たな時代を迎え、リーダーシップをそなえ国際的な視野で活躍できる女性の育成をおこなっていききたいと考えています。



また、本学の新たな教育方針として、リベラルアーツを全学で進めることとしました。昨年度から「お茶の水女子大学論」という授業を始めましたが、これは学部をこえて大学全体で運営しております。お茶の水女子大学はどういう大学なのか、どのような先輩を輩出してきたのか、大学生活を有意義に過ごすためには何をすればいいのか、先生方、また先輩と一緒に考えていきましょう、というものです。そして、今年度から「21世紀型文理融合リベラルアーツ」教育を開始いたします。知識基盤の社会を担っていくためには多様な思考、多様な行動ができる人が求められており、また少子高齢化が進んでいくなかで、女性にかけられた期待は非常に大きいのです。本学のリベラルアーツ教育も、このような社会の要請、世界の趨勢によって生まれたものです。

みなさんには、このお茶の水女子大学のキャンパスで4年間の大切な時期を過ごしていただきたいと思います。先生方との出会い、友人たちとの出会いを大切にしてください。本学の教員は40%が女性です。その方たちはみなさんにとっての良きロールモデルとなり、これからいろいろなキャリア、あるいは人生を設計していく際のお手本となることでしょう。また、約2万人におよぶ本学卒業生もみなさんに熱い期待を寄せ、いつでも本学のために協力したいとおっしゃっています。どうぞ、教員、友人、卒業生との出会いを大切にしてください。そして、大学で学ぶことにより、英知をみがき、女性が生涯を通じて個人としての自己を確立し社会への参加を貫いていくことの大切さを身につけていただきたいと思います。

お茶の水女子大学は比較的小さな大学でございますが、大きな大学とは違うよさをさまざまにそなえた、きらりと光る宝石のような大学であると思っています。そして、本学入学されたみなさんのお一人お一人が、私たちにとってとても大切な宝物でございます。これから4年間、本学での生活を豊かにそして有意義に過ごしていただきたいと祈念いたしております。

（抜粋）

平成20年度入学式

学長告辞

キャンパス点描

平成20年度「成績優秀者奨学金」「桜蔭会研究奨励賞」授与式

4月23日（水）、本学独自の奨学金のうち「お茶の水女子大学成績優秀者奨学金」「お茶の水女子大学桜蔭会研究奨励賞」の授与式が行なわれました。

成績優秀者奨学金は、学部に入学者のなかから入学に際して特に優秀な学生20人に贈られるもので、今年で4年目です。桜蔭会研究奨励賞は、本学の学部から大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程に進学した学生のなかから特に優秀でかつ将来が嘱望されると認められる学生に贈られるもので、昨年度から新たに社団法人桜蔭会の助成により発足した奨学金制度として、今年度は5人が受賞しました。

本学理事、齋藤桜蔭会会長及び学部長、研究科長等関係の教員臨席のもと、25名の受賞者に郷学長から一人ひとり賞状と奨学金、奨励賞が手渡され、お祝いと励ましの言葉が述べられました。



大学院オープンキャンパス2008開催

4月26日（土）に、大学院オープンキャンパス（受験生説明会）を開催いたしました。

今年は約450名の方々にご来場いただき（昨年は約300名）、大学講堂（徽音堂）で郷学長及び三浦教育機構長から大学院の教育研究活動状況に関する全体説明会がありました。

その後、博士後期課程では専門研究指導の紹介と専門分野の指導教員から直接説明を聞く機会が設けられ、博士前期課程では各専攻コース別に分かれての説明会が実施されました。また、入試やカリキュラム、奨学金、学生宿舍、就職、留学などの各種相談コーナーも開設し、多くの方が相談に訪れていました。



「学生ポータルサイト」開設

学内はもちろん学外からでも、授業や学生生活に関する情報にアクセスが可能な学生ポータルサイトを平成20年度より開設しました。今後は、この学生ポータルサイトに履修情報やイベント関連などの各種情報を掲載し、学生生活の利便性を推進します。

- パソコン用ホームページ <http://tw.ao.ocha.ac.jp>
※学生ポータルサイトへのアクセスには「お茶大アカウント」が必要です。
- 携帯電話用ホームページ <http://tw.ao.ocha.ac.jp/k/>
※携帯電話用ホームページで学生個別の情報を閲覧するには、携帯ログイン用のURL送信が必要です。

第二回ホームカミングデイ開催

新制お茶の水女子大学の開学記念日にあたる5月31日（土）に第二回ホームカミングデイが開催されました。あいにくの雨で足元が悪いなかにもかかわらず400名を超える卒業生の方々が参集されました。

大学全体企画として名誉学友記贈呈式、郷通子学長と土屋賢二教授による公開講演会、お茶の水女子大学後援会総会がおこなわれたほか、名誉教授による講演会や各サークルを中心としたイベント、卒業生企画として桜蔭会愛知県支部「ピリカ会」によるコンサートなどもおこなわれました。

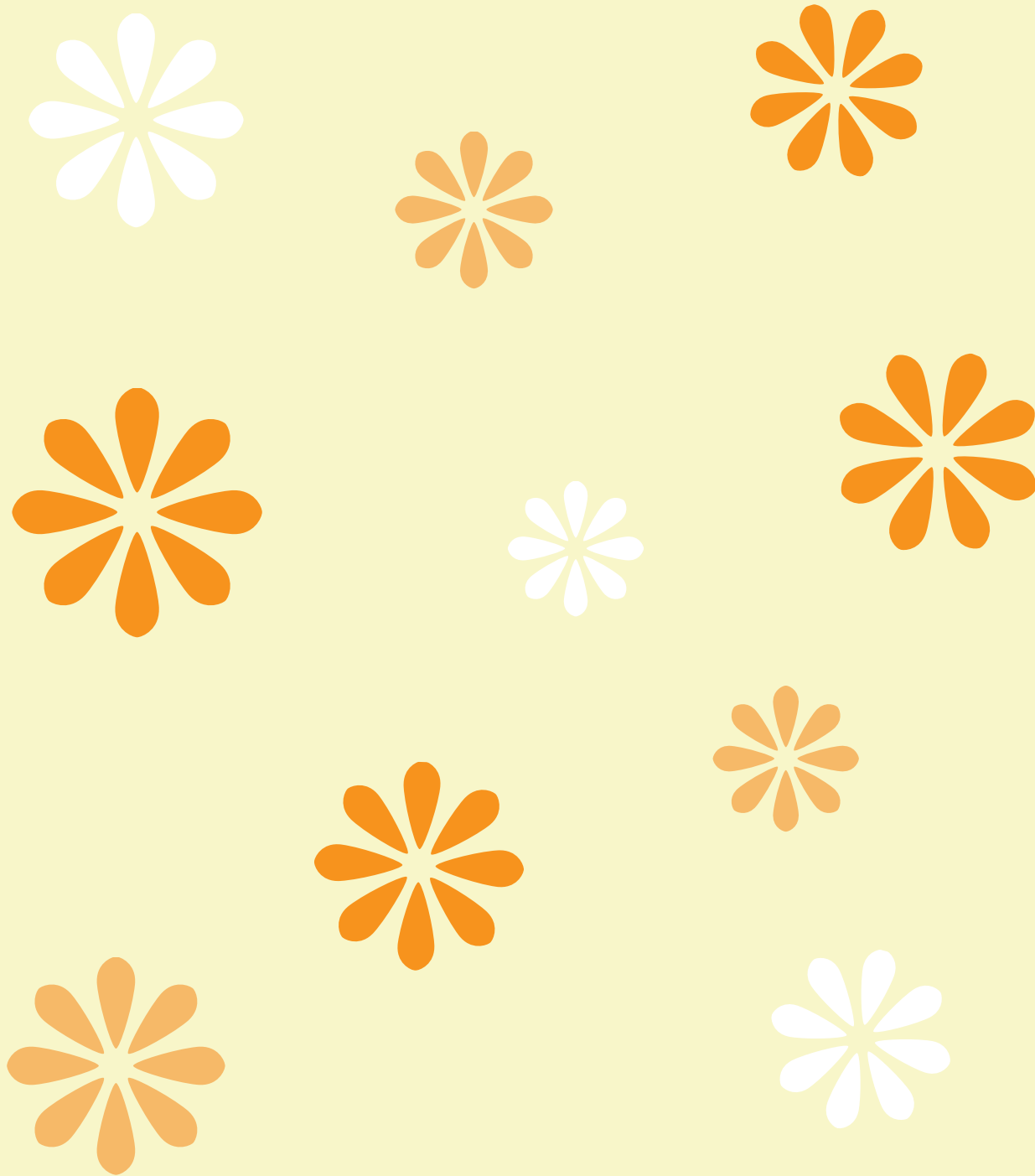


恩師や同級生との再会に喜ばれたり、お茶の水女子大学の昔について懐かしそうに在學生に語られる卒業生の姿が印象的でした。

なお、来年度以降、ホームカミングデイは毎年5月最終土曜日に開催されることとなりました。



キャンパス点描



お茶の水女子大学学報 第217号

▽発行 日： 2008年7月20日

▽発行 行： 国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail: info@cc.ocha.ac.jp

URL: <http://www.ocha.ac.jp/>

編集協力：インタビュー 佐藤悠（お茶の水女子大学文教育学部）

デザイン 池亀直子（お茶の水女子大学人間発達科学専攻卒）